

TOKUMA
冒険&推理
特別書下し

虚飾 の 自画像

小杉健治

Kenji Kosugi

徳間書店

虚飾 の 自画像

徳間書店

虚飾の自画像

第一刷 一九九〇年六月三〇日

著者 小杉健治

発行者 荒井修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四一〇一一 郵便番号 一〇五
電話 〇三ー四三三ー六二三一
振替 東京四一四四三九二

印刷所

本文・図書印刷株式会社

製本所

カパー・近代美術株式会社
大口製本印刷株式会社

定価は帯・カパーに表示してあります。
落丁・乱丁はお取替をいたします。

© Kenji Kosugi 1990 Printed in Japan
[編集担当・高田曉郎]

ISBN4-19-124212-1

目次

第一章	めぐり逢い	5
第二章	不倫	46
第三章	北山しぐれ	77
第四章	雪崩	121
第五章	冬景色	171
第六章	九重桜	219

装 装
幀 画

田 中
淵 井
裕 純
一 子

虚飾の自画像

第一章 めぐり逢い

1

山名啓司は目の前の上田を無視して目を閉じた。電車の振動が固い座席を通して体に伝わる。名瀬光二の『冬の旅』を競り落とせなかった悔しさが改めてわきあがった。

「おい、呑まないなら呑んでしまうぞ」

膝を叩かれて目を開けると、上田が鎌倉駅の売店で買った罐ビールをかざしていた。一本を空にしてしまい、山名のぶんをねだっているのだ。黙ってうなずいてから、山名は窓の外に目をやった。

鎌倉市内の文化会館の会議室を借りて開かれた絵の交換会での光景が頭にこびりついている。闇への移ろいにつれて輝きを見せはじめた街の灯が、妙に神経にさわる。大船観音が後方に流れた。快速は大船駅を出たところだった。

窓ガラスに不貞腐れたようにビールを呑んでいる上田の姿が映っている。目をずらすと、自分

で描いている以上に老けた顔が自分を見つめ返してきた。若いつもりでいても来年は四回目の年男なんだと、額の深い皺しわを見た。

「なぜ、ふっかけなかったんだ？」

思い出したように、上田がまたくどくどと文句を並べた。感情の起伏の激しい上田に閉口しながら、山名は言い返した。

「向こうはどんどん値を吊り上げていきますよ。あれ以上続けても無駄です」

落札したのは、岩井画廊であった。五千万からスタートした値が、最後には岩井画廊とこちらの争いになり、常に向こうはこちらの値に対抗した。一億二千万の値を相手が出したとき、山名は下りた。

「だいたい、美術館を作ることを思いついたのは、君なんだ。肝心な君がもつとすっかりしてくれなければ、宝の持ち腐れになる」

上陽海上火災保険の上司の威厳あざむきを露に上田は悪態をつく。交通事故が多発する中で保険金の支払いをめぐるトラブルも多く、上陽火災に対する世間のイメージはあまりよくない。今度、新社屋を建設するに当たり、最上階に美術館を作るように進言したのも、悪いイメージを払拭しようという意図もあった。

「名瀬光二はうちの目玉じゃなかったのか」

罐ビールを片手に、上田は同じ文句を繰り返した。

名瀬光二は二年前に九十五歳で亡くなった日本画の巨匠である。作品点数が少なく、画壇とは

無縁の孤高の画家であった。コレクターの多くは彼の絵を秘蔵した。したがって、名瀬光二の絵が市場に出回るといふことは少なかった。

今回の交換会に名瀬光二が出るという情報を知ったとき、山名は勇んで上田を誘って乗り込んだのである。

上田の愚痴は東京駅に着くまで続いた。

ごくろうさまの一言のあいさつもなく、上田はさっさと離れていった。あとを追う気にもなれず、山名は山手線に乗り換えた。

上野駅で降り、常磐線ホームに向かったが、途中で気が変わった。浅草口の改札口を出て、昭和通りを横断した。

九月半ば。夜になると肌寒さを感じる。

芸大出身のマスターがやっている『青い画集』というスナックが下谷神社したやに近い所にある。壁一面に無名の作家の絵が飾ってある。有名になった画家の絵は取り外してしまうという変わった癖があった。

山名が入っていくと、鬚面ひげづらのマスターが無愛想に迎えた。

「濃い目にしてくれ」

カウンターに腰を下ろしてから言う、山名は背広の内ポケットからたばこを取り出した。

「ずいぶん、お疲れのようですね」

愛想はないが、気のおけないマスターがライターの火を差し出した。目を細めて、たばこに火

をつける。

水割りをお代わりし、たばこが二本目になって、ようやく気持が落ち着いた。

美術館開設の企画は専務の上田に上申し、彼の力添えによって実現したのである。

四人の客が入ってきて、山名は椅子をずれた。そのとき、壁に新しい絵がかかっているのを見た。

紺碧に染まった空に、黒い雲が張りめぐらされ、漁船が大きな波のうねりを受けて今にも転覆しそうだ。雲の切れ間からは少女の顔が覗いている。山名を驚かしたのは、その不気味な構図より波の色である。

「どうぞ」

新しい水割りが置かれたが、山名はまだその絵に吸い寄せられていた。

「あの絵」

山名はやつと声を出した。

「あれですか、ちよつと面白いでしょう。特に、あの真赤な波。何か体の奥からたぎってくるような激しさがあります」

鬚面の顔に似合わず、マスターは女のような声で説明した。

「この作家は？」

動揺を悟られないようにきいた。

「深山純という画家です。偶然に青山の画廊で見つけたんです」

「深山純？ プロフィールを知らないかな」

あまりに熱心に感じたのだろう、マスターは奥に引っ込んでから、

「パンフをもらったんですが、ちょっと見当たらないんですよ」

と、すまなそうな顔をしてもどつてきた。

「氷がとけちゃいますよ」

マスターの声にやっと我に返った。

新しい客が来て、マスターは移動していった。いかにも芸術家の卵らしい髪を長くした若者ふたりであった。

山名はしばらくしてから立ち上がった。

マスターに声をかけてから店を出た。深山純の絵を見た衝撃の余震はまだ続いている。

強烈な赤の使い方には、精神を狂わす何かがあるような気さえする。まだ網膜に鮮やかな赤が染まっているようだ。

だが、山名の興奮はあの絵そのものにあるわけではなかった。赤の使い方といい、作風といい、ある人物を連想させるのだった。

上野駅の構内は混雑していた。改札を抜け常磐線ホームに上がると、勝田行き最終電車が停まっていた。

山名はホームの真中辺りに移動しようとして足を止めた。柱の陰にいる女の顔が目飛び込んだ。細面で切れ長のきつい感じの目。スチュワーデスをしていただけあって姿勢もよく、容貌に

自信を持っている。少し、小生意気そうな顔立ち。妻の彰子である。ひとりではなかった。別れを惜しむように、妻が手をとっている相手は背中を見せている。長身の背恰好を見て、ある人物を連想したが、そんなはずはないと思ひ直した。

妻が車両に乗り込む。男は柱の陰に隠れた。

発車のベルが鳴った。山名は一つ隣の車両に乗り込んだ。

ゆっくり電車が動き出す。窓からホームを覗いたが、男はすでにいなかった。

暗い彼方に明かりが灯っている。列車の振動に身を任せながら、先程の光景の意味を考えていた。彰子と結婚して二十年になる。子供が出来なかったせい、彼女はカルチャーセンター、スポーツクラブなどに通い外に出ることが多かった。

暗い車窓をながめながら、波立つ心を押さえた。

取手に近づき、彼女が席を立った。山名はあわてて顔をふせた。階段を上がっていくと、人の流れの中に、彼女の後ろ姿が見え隠れする。山名はわざとゆっくり歩いた。

タクシー乗場に、長い列が出来ている。妻は列の真中辺りにいた。気づかれないように、人の陰に顔を隠してタクシーを待った。

妻を乗せたタクシーが走り去った。山名がタクシーに乗り込んだのは十分後だった。

団地の前でタクシーを下り、玄関に向かった。鞆を持った男がエレベーターを待っている。隣の部屋の主人で、だいぶ、呑んでいるようだった。

話しかけられて適当にあいづちを打ってから、六階で下りる。男はおぼつかない足取りで、山

名の部屋を越して自分の家に向かった。

男が隣の部屋に入ってから、鍵を出して差し込む。扉を開けると、妻の靴は下駄箱に片づけられていた。奥の部屋に行くと、小さな明かりが灯っているだけだ。

寝室を覗くと、妻はふとんに入っていた。まだ寝ているはずがないのに、彼女は起きてこようとしなかった。冷えびえとした空気が室内に充満していた。

2

山名は退社時間が迫ると早々と机を片づけた。エレベーターの前で鉢合わせした他の部の課長が一步下がって、山名を見送った。背中に敵意のこもった視線を感じながら、先に箱の中に入った。彼は乗ってこなかった。

社会的還元を訴える山名をうとましく思っている人間が幹部の中にいる。美術館設立には最初から反対意見が多かった。上田の力添えがなければ、美術館設立はかなわなかっただろう。

日比谷線で上野に出る。電車にゆられながら、名瀬光二の絵と深山純の絵を並べるのもいいかもしれない、そんな想像をした。深山純があつた白崎純子ならばの話だが……。

白崎純子に会ったのは高校三年のときだった。美術部に入ってきた彼女の絵は幼稚だったが、その色の使い方に強烈な迫力があつた。

純子は母ひとり子ひとりの貧しい暮らしをしていた。いつも私に金があつたらと嘆いていた。

大学を卒業後、山名は彼女と同棲したのだ。

上野で下りると、昭和通りの地下鉄出口から外に出た。足はまっすぐに『青い画集』に向かう。扉を押すと、深山純の絵が目に入った。

あの赤の使い方は白崎純子のものに似ている。粗かったタッチは洗練されているが、この色の感覚は彼女のものだ。

マスターの呼ぶ声に、山名はやっとカウンターに収まった。

「ずいぶん気に入ったようじゃないですか」

笑ってごまかしたが、彼女とのことは誰にも語ったことはない。

「この絵を買った画廊を教えてくれないか」

山名はきいた。

「青山にある藤崎画廊です」

マスターはメモ用紙に地図を書いてくれた。

帰宅すると、妻はいなかった。ゆうべの男の背中が蘇^{よみがえ}った。今夜もその男といっしょのような気がした。

ベッドに仰向けになって目を閉じると、深山純の絵が^{まぶた}瞼に浮かぶ。あの絵に使われている赤が、二十五年前の彼女との暮らしを思い起こさせるのだ。青春時代の燃えた時期であった。忘れていた若さが噴き上げてきた。

同棲生活のなかで、彼女はいつもキャンバスに向かっていた。たまに旅行に出掛けると、何日も

帰って来ないことがあった。比叡山の山中に一週間も閉じ籠もって絵を描いたり、北海道の奥地までスケッチ旅行に出かけた。

そんな暮らしが一年も続いたとき、彼女がパリに行くと言い出した。あまりに唐突な言葉に面食らい返す言葉を失った。絵にかける情熱は理解していたが、彼女の才能を信じているわけではなかった。いつか諦めるだろうと、じつと彼女の情熱が冷めるのを待った。しかし、消えかかきそうな炎はたゆまず燃えさかっていたのだ。

だから、パリに行きたいと言ったとき、山名はたまっていた鬱積^{うっせき}を吐き出すようについ叫んでしまった。

「もう諦めてくれ。絵なんか捨てて正式に一緒になろう」

そう言ったとき、彼女の表情は蠟^{ろう}人形のように蒼白になり、次に紅潮した。心に巣くっていた、画家なんかになれるわけがない、という思いがもろに相手に伝わったのだろう。近くにあった灰皿を投げつけヒステリックに叫んだ。

「もうあんたの顔なんて見たくない！」

それが彼女との最後であった。翌日、山名が会社から帰ったとき、彼女は部屋を出たあとだった。

絵の道を進むために結婚はじやまだという書置きを残して、彼女は去って行った。廊下で音がした。反射的に置時計に目をやる。十二時をまわっていた。

寢室の扉が開いた。

「帰っていたの」

妻がけだるそうな声を出した。

「もう眠るところだ」

山名は枕元の明かりを消した。

「お友達がいろいろ相談に乗ってくれというものだから」

妻が言い訳を言った。山名は寝返りを打って彼女に背中を向けた。

乱暴に戸を閉めた音がした。

寝つかれず、山名は起き上がり居間に行った。妻はソファ―に座って水割りを吞んでいた。

自分も水割りを作り、彼女の向かい側に腰をおろした。

彼女は逃げるように、体の向きを変えた。

「ゆうべも遅かったんじゃないのか。何時に帰ってきたんだ」

今朝、ききそびれたことを改めて口に出した。

「十時過ぎかしら。皆さんは二次会に行ったけど、私はそのまま帰ってきたの」

妻はいけしゃあしゃあと言った。よほど、いっしょの電車だったと言おうとしたが、言い合いになる面倒を避けた。

翌日、山名は会社を早めに抜け出して青山に向かった。

藤崎画廊は表参道から歩いて十五分。青山通から銀行の横の路地を折れて十分ほど行ったと